

令和 2 年 6 月 18 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K12339

研究課題名(和文) 学校教諭のための病気や障害をもつ子供の復学支援プログラムの開発と検証

研究課題名(英文) Development and verification of a program to support school rehabilitation for children with illness and disabilities

研究代表者

井上 由紀子 (INOUE, YUKIKO)

東北大学・医学系研究科・非常勤講師

研究者番号：20596100

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：病気や障害を持つ子供の復学について、学校教諭への調査により必要な支援を明らかにすると共に、学校教諭と医療者各々の役割を明確化することを目的に調査を行った。

研究の結果、以下の点がプログラムの要素となった。

(1) 医療と学校の双方向からの情報共有できる場の設定、(2) 子供や家族に対する意思決定の教育、(3) 学校での十分な人的資源、社会資源の提供、(4) 利用しやすい相談システムの構築、(5) 保護者への社会・心理的支援の強化

研究成果の学術的意義や社会的意義

子供や家族の支援においては、子供や家族が適切な支援が受けることができ、学校生活の質が向上する。また、子供や家族が自分の思いや身体の状態を適切に伝えられることで、主体的に学校生活での支援が受けられるようになる。

学校教諭や医療者の支援においては、子供に対する効果的な復学支援を実施する際の課題(人的・社会的支援の不足)が顕在化することことで、対象となる学校と医療の2者間での対応ではなく、行政などに具体的な支援を求め体制作りを進めることができる。また、復学支援についての均てん化を図ることができる。

研究成果の概要(英文)：Surveys of school teachers to determine the support needed for children with illnesses and disabilities to return to school. The survey was conducted with the aim of clarifying the roles of schoolteachers and medical personnel respectively. As a result of the study, the following elements of the program were identified

(1) Establishing a place for two-way information sharing between health care and school, and (2) Decision-making for children and families education, (3) provision of adequate human and social resources in schools, and (4) an accessible consultation system. (5) Strengthening social and psychological support for parents.

研究分野：小児看護学

キーワード：子供 復学支援 学校教諭

1. 研究開始当初の背景

医療の進歩により先天性心疾患、糖尿病、アレルギー疾患、発達障害など病気や障害をもちながらも学校生活を送る子供が多くなっている。子供達は日常生活を送る上で病気や障害について周りの理解や配慮を必要としており、このような環境が整えば健康な子供たちと同じような生活を送る事が可能となる。特に、学校教諭には適切な知識と対応が求められている。子供の医療で先進的に復学支援や研究がなされている小児がんにおいては、晩期合併症や子供の就学・自立といった問題が生じ治療後の長期的な影響に対する支援の検討が国策として進められている(厚生労働省, 2012)。入院中の子供達は治療が優先され入院初期から退院後を見据えた復学については検討されず、退院直前になって慌てて検討することが多いのが現状である。治療中の患児や保護者は、学校生活のどのような点に配慮して欲しいのかイメージがつかず、学校教諭は病気や障害の知識や理解が十分ではなく、患児や保護者に配慮する点、緊急時の対応、クラスメイトへの対応など患児を受け入れる環境が十分に整っていないことが多い。近年、退院前に学校教諭や医療者でカンファレンスを行うようになってきているが、学校教諭が知りたいことと医療者が説明する内容や詳細さに乖離が生じている事実もある。さらに、研究成果として作成されている復学支援のマニュアル類も十分に普及・活用されていない現状があり、支援方法も施設毎の取り組みに終始しており均てん化した対応はできていなかった。

2. 研究の目的

医療の進歩で患児の多くは入院後の復学や外来通院での治療が可能になり、個別の対応や配慮により健康な子供と同じように学校生活を送ることができるようになった。一方で、学校教諭が病気や障害への理解が不十分なことや、子供や家族への支援が適切に行われていないための不登校事例も増えている。以上から「学校教諭のための復学支援プログラム」や「子供のためのオーダーメイドの復学支援プログラム」に関する研究を早急実現する必要があると考えている。本研究はその基盤を目指し、学校教諭のための病気や障害をもつ子供の復学支援プログラムの開発と検証を行う。また、復学に学校教諭や、医療者への調査により必要な支援を明らかにすると共に、学校教諭と医療者各々の役割を明確化する。

3. 研究の方法

- (1) 文献・情報の収集および支援の枠組みと要素の抽出
- (2) 学校教諭に復学の経験と医療機関に求める支援のニーズの把握
- (3) 病気や障害をもつ子供の復学支援プログラム(案)の開発

4. 研究成果

- (1) 教育プログラムやコンピテンシーについて文献上のエビデンスの抽出
院内学級に通学している子供とその保護者を対象にした調査では、患児はQOLの向上、治療意欲の向上、勉強に対する不安の軽減を強く実感しており、また、保護者は気分転換、生活リズムの安定、充実感の高まり、治療意欲の向上、学習の遅れの補完を実感していた。
復学支援は病気の子供や家族、医療関係者、教育関係者双方からのニーズは高いものの、実際に支援に携わった学校教諭や管理者は少ないことが分かった。プログラム(案)にどれだけ現場の声を反映させることができるのかが大きな課題と考えられる。
- (2) 学校教諭に長期欠席児童に対する復学の経験と医療機関に求める支援を質問紙で実態とニーズ把握
小中学校教諭を対象に、担任もしくは副担任として長期欠席児童の復学支援について質問紙調査を実施した。
復学支援は担任や副担任が中心的役割を担い、学校管理者やその他の教員との連携しながら実施されてきたため、学校内で孤軍奮闘していることはなかった。
復学支援が効果的に行われた際には子供や家族と丁寧で密な情報共有や、医療側からの情報提供により、学校における必要な支援が十分に検討されたことによるものであった。
今後の必要な支援として医療機関に対しては、子供側のタイミングでの支援だけではなく、学校で検討事項が生じた際にも相談ができるシステムを希望していた。また、学校生活においては、子供だけでなく家族への支援、特に母親への心理的支援の必要性が高まっており、これについて受診の際にケアをして欲しいという結果であった。
行政や学校に対しては、個別対応を要する複雑な事例が多くなっている現状を踏まえ、人員や場所が不足していることの改善を求めている。また、限られた人員や場所で支援であれば、実際の支援を行うにあたり、スピーディーな意思決定が必要だと感じていた。
行政、学校、医療について、組織的で利用しやすい相談システムの構築が必要と考えられた。
子供や家族に対しては、学校と情報を共有することが効果的な支援につながるため、子供や家族が遠慮なく、学校に不安なことなどを伝えて欲しいとしていた。これまでの研究でも、子供や家族は学校へ相談していいことだと思っていなかったり、子供自身も自分の身体のことを正しく伝えられないことが明らかになっている。日頃から、子供が自分のセルフケアの一環

として、身体、気持ちや思いを他者に伝えられるような教育を家庭や学校でも必要であり、周囲にいるおとなに広く伝えていく必要があると考えられる。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6 . 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	相墨 生恵 (Aizumi Ikue) (00305260)	東北大学・医学系研究科・非常勤講師 (11301)	
研究分担者	塩飽 仁 (Shiwaku Hitoshi) (50250808)	東北大学・医学系研究科・教授 (11301)	
研究分担者	入江 亘 (Irie Wataru) (60757649)	東北大学・医学系研究科・助教 (11301)	